

データ連携基盤 研究会

～The Third Way for JapaneseDX～

2026年8月24日(月)

DRC-IV分科会

宇野澤、伊藤

日本の現場力を活かす「第3の道」：データ連携基盤実践研究会

欧米流の模倣（デジタル）

現場の知恵（アナログ）

- 欧米流の模倣ではない、日本独自のDXの形を模索
- 「現場の知恵」と「デジタル」をどう繋ぐか

理論と実践のブリッジによる、製造業の再定義

第3の道（製造業の再定義）

なぜ、製造業でDXが進まないのか？：構造的ミスマッチの露呈

欧米製ERP

全体最適（経営視点）



全体最適（経営視点）が、
現場の負荷上昇を招く矛盾

業務が「人」や「関係性」に
埋め込まれ、標準化を拒む

人や関係性に埋め込まれた業務

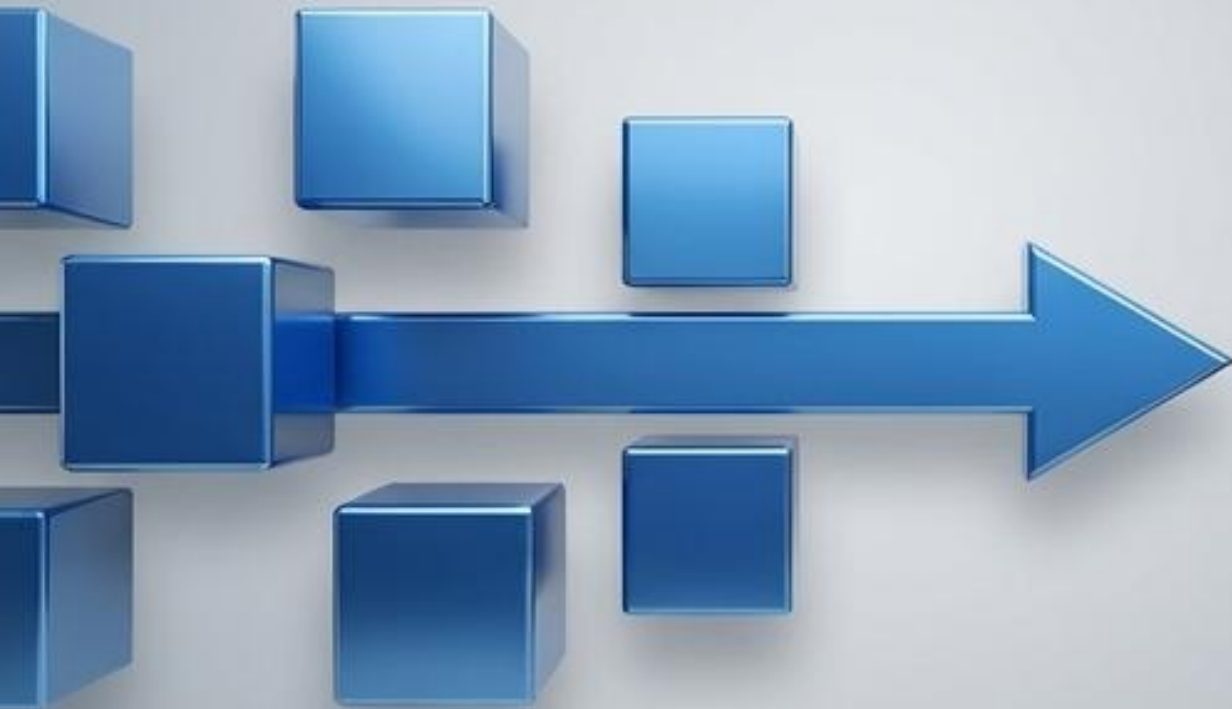
状況依存型の業務

根本的なデータ構造を組み替えず、
対症療法的な「現場改善」で止まっている

欧米製ERPが、
日本の「状況依存型」の業務に適合しない

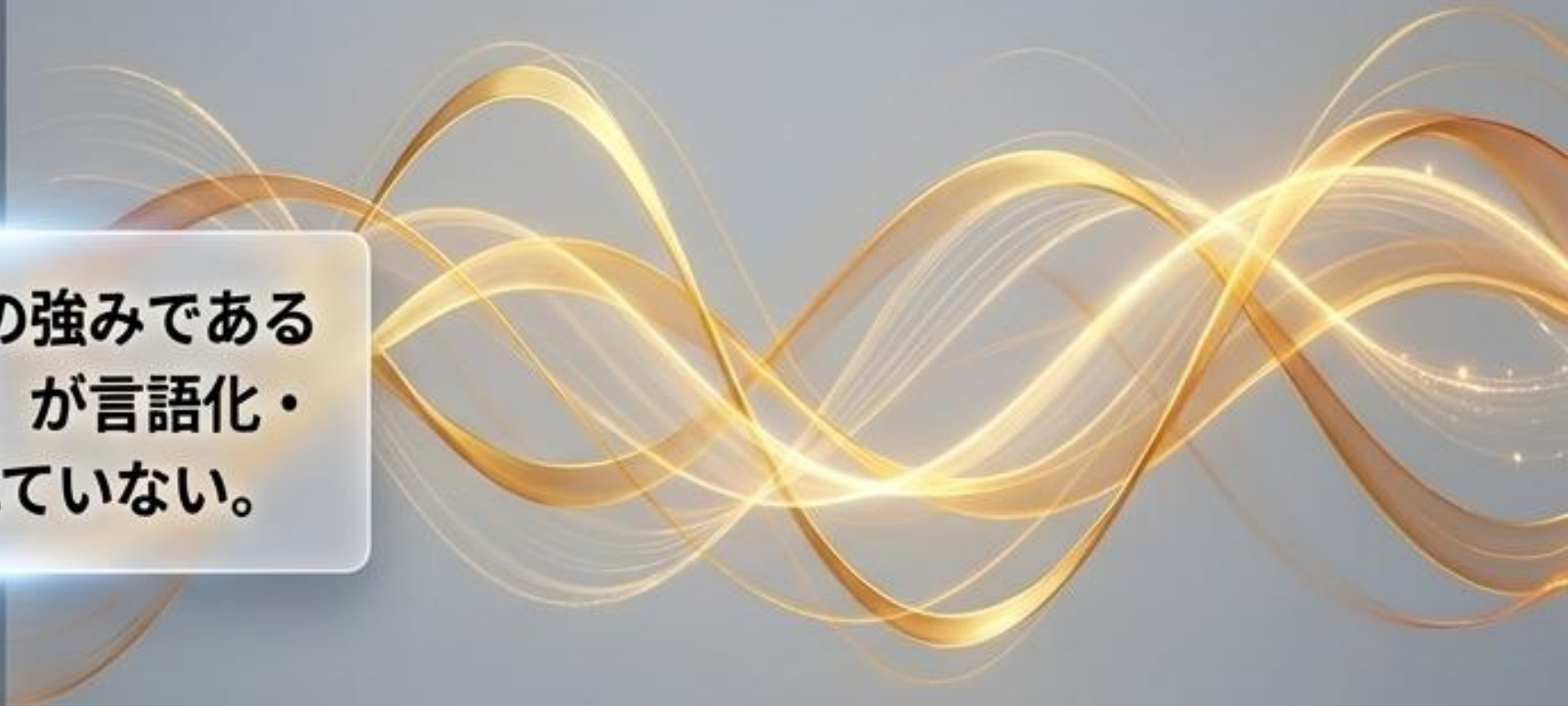
概念の転換：「名詞思考」の西洋と「動詞指向」の日本

西洋 / 名詞思考 (Noun Thinking)



- ・実体を固定
- ・トップダウンで徹底的に標準化する (手順 / L1)

日本 / 動詞指向 (Verb Thinking)



- ・絶えることのない「コト・流れ」を捉える
- ・ボトムアップで適応する (判断 / L2)

課題：日本の強みである
「調整の知」が言語化・
再利用されていない。

解決策：業務を「手順 (L1)」ではなく「判断 (L2)」の連続として捉え直す。

研究会の目指す姿：「理論」と「実践」の往復による体系化

ゴール：誰もが参照できる「業務判断工学」の確立

Step 1「理論」：
データ連携基盤の本質と
国際標準動向を明確化

Step 3「体系化」：成功事例をモデル化し、
日本独自のDX理論を提言

Step 2「実践」：
現場の課題(非連携コスト)を
可視化し、解決策を試行

DXの未来：人間は「意味の設計者」へ、AIは「判断の伴走者」へ



まとめ：本分科会に参加するメリット

自社への実践価値

現場の「あうんの呼吸」を殺さず、
デジタル化する具体的手法が手に入る

推進力強化

「理論」に裏打ちされた説得力で、
社内推進のオーナーシップを握れる

客観的視座

異なる業種のリーダーとの「集合知」による
レビューで、自社の課題を客観視できる

社会的インパクト

日本の製造業を再興させる
「新理論」の共同創作者になれる

日本の製造業のOSを書き換え、
世界をリードする新たなモデルを共に作りませんか？

